

ブラジル特報

Notícias e Informações

No. 1613

2013年3月号



ブラジリアの3権広場―労働戦士像と最高裁判所（右奥）
写真提供：内木 秀道氏

ÍNDICE／目次

ブラジルにおける理系人材育成政策と
日本・ブラジルの関係強化……………2
井上睦子

医療をめぐる ことばの壁を越える……………4
林田 雅至

●社会
カーニバル、せっかくなので、
もう少し理解度をあげていただくために……………6
細川 多美子

最近のブラジル政治経済事情……………8
―外務省中南米局提供情報その他より

●日系企業シリーズ
ヤンマー・サウスアメリカ……………9
食料生産・エネルギー変換の分野でブラジル社会に貢献
北原 健二

●文化評論
細川周平『日系ブラジル移民文学Ⅰ』
(みすず書房)を読む……………10
岸和田 仁

●エッセイ
ブラジル流国家資本主義？
新しい経済モデルの模索……………11
菅藤 和彦

イベント・新刊書紹介……………12

発行：一般社団法人日本ブラジル中央協会

〒105-0004 東京都港区新橋 1-17-1 新幸ビル 電話 03-3504-3866 FAX 03-3597-8008

編集人：桜井敏浩

URL : <http://nipo-brasil.org/> E-mail : info@nipo-brasil.org

頒布価：700 円

ブラジルにおける理系人材育成政策と日本・ブラジルの関係強化

井上 睦子（東京大学国際部長、前在ブラジル大使館一等書記官）

はじめに

今や世界第6位の経済規模を有するブラジル。2011年1月に就任したルセーフ大統領は、ブラジルを最も先進的で、格差の少ない、起業家精神に溢れた中間層の国にすると表明し、そのために様々な政策を打っている。代表例としては、大規模なインフラ整備等を内容とする成長加速化計画、また、格差是正と公共投資の意味合いを有する低所得層向け住宅建設計画などハードもので比較的短期間での成果が期待される政策、および今般本稿にて紹介する理系人材育成戦略 *Ciência sem Fronteiras*（「国境無き科学」）を挙げることができる。これはソフト面での投資であり、政策の効果は中長期にわたって現れるものである。これらの短、中、長期的政策の組み合わせにより、足腰の強い、今より一步進んだ国にしようというのがルセーフ大統領の思いであろう。

ブラジルは食糧やエネルギーなどの資源に大変恵まれ、これらが主たる輸出品目となっている。ごく一部、中型ジェット旅客機の製造など国際競争力を有する工業製品があるものの、製造業の国際競争力は全般的に極めて低い。ブラジルが次の発展段階に登ることができるかどうかは、付加価値あるモノを創り出したり、その源となり得るような研究成果を出したりできるにかかっている。そのためには、人材育成が不可欠だ。そこで打ち出されたのがシエンシア・セン・フロンテイラスである。

北米および欧州の経済が行き詰り、中東やアフリカの一部では民族や政治体制の問題が表面化する中、ブラジルは安定した民主主義体制に加え、資源に恵まれた自然災害の少ない広大な国土を有し、経済成長にともなって交通や港湾などのインフラ需要はまだまだ伸びる。このような国を放っておく国があるだろうか。北米、欧州は勿論のこと、中国、韓国も「国境無き科学」を活用してブラジルの理系人材育成に協力することにより、高等教育、学術、科学技術、ひいては経済面でブラジルとwin-winの関係を戦略的に構築しようとしている。さて、日本はどう関わっていくか。

シエンシア・セン・フロンテイラスの内容

(1) 概要

シエンシア・セン・フロンテイラスは、約10万人の理系分野のブラジル人の学部生、博士課程学生およびポスドクをブラジル政府の奨学金で外国に留学させることにより、ブラジルの科学技術発展の促進、競争力の強化を図ること等を目的とする、ルセーフ大統領のイニシアティブにより立ちあげられたプログラムである。特徴は、各国企業等でのインターンシップを重視し、ブラジルの産業育成につなげることを明確に目標としている点である。実施期間は2011～15年の予定であり、対象分野は、理学、物理学、化学、生物学、地学、バイオテクノロジー

一、コンピューター・サイエンス、情報技術等、理系全般となっている。

(2) 日本での受入れ

2012年7月31日（火）、シエンシア・セン・フロンテイラスについての日本ブラジル間での協力文書に、独立行政法人（以下（独））日本学生支援機構（JASSO）、高等教育支援・評価機構（CAPES）および国家科学技術審議会（CNPq）の理事長名で署名がされた。

日本では具体的受け入れ機関は、大学、大学共同利用機関法人および研究開発型独立行政法人である。約80の機関が受入れ可能としており、1年間の目標受入れ人数は1,300人である。

学部生および博士課程学生を対象とした、いわゆる「サンドイッチ」型プログラムは、学位取得までの中ほど1年程度を外国で学ばせるものであることから、ブラジル人学生が効率的に自身の専門分野を学ぶことができるよう、日本での受入れ機関は、英語で授業等を提供できる機関とした。

学部生については、2013年の秋の受入れに向けて、本年1月中旬に日本留学への応募が締め切られ、多数の応募があった模様である。CAPESおよびCNPqによる学生選考ののち、JASSOが学生の希望を踏まえて学生と受入れ候補大学とのマッチングを行うこととなる。

博士およびポスドクについては、基本的に国別公募は行っておらず、以下のとおり、世界各国共通のスケジュールで公募が行われている。

	第1回	第2回	第3回
申請登録	2012.10.1～2013.131	2013.2.1～2013.5.31	2013.6.1～2013.9.30
審査	2013.4	2013.8	2013.11
結果	2013.5	2013.9	2013.12
奨学金の支給 開始時期	2013.6, 7, 8, 9～	2013.10, 11, 12, 2014.1～	2014.2, 3, 4, 5～

応募者は、外国の大学等から予め受入の内諾を得た上で、CAPES及びCNPqに奨学金の登録申請をすることとなっている。

日本留学については、査証取得のスケジュールの観点から、第2回の奨学金支給開始時期を希望する場合は第1回のタイミングで申請登録するといったように、1回前倒したスケジュールでの申請登録を勧めている。

(3) 日本留学に対するブラジルの関心

世界の学生がまず目を向ける主な留学先といえば米国や欧州各国であるが、ブラジルの政府、大学関係者および学生は日本への留学に非常に高い関心を持っている。

2012年6月21日に行われた日本・ブラジル外相会談では、パトリオッタ外相からシエンシア・セン・フロンテイラスによるブラジル人留学生の受け入れに関する協力要請があり、同年11月に訪日したピメンテル開発商工大臣が藤村内閣官房長官を訪問した際には、日本のシエンシア・セン・フロンテイラス

についての協力に対して感謝の意が表された。

2012年7月29日～8月3日には、CAPESのギマランエス理事長を団長として、ブラジル外務省教育テーマ課長、また、サンパウロ大学、カンピーナス大学およびITA（航空技術大学）等を含むブラジルの主要大学の幹部計30名が訪日した。参加者からは、これほど多くのブラジルの大学関係者が一度に訪日したのはおそらく初めてであり、日本の教育研究への関心の高さを示している、といった声が聞かれた。日本滞在中、ブラジルミッションは、在京ブラジル大使館、外務省、文部科学省、東京大学、京都大学、大阪大学、筑波大学、横浜国立大学、芝浦工業大学、(独)宇宙航空研究開発機構(JAXA)、(独)物質材料研究機構(NIMS)、(独)理化学研究所(スーパーコンピュータ京)、(独)日本学術振興会(JSPS)、国立大学協会、日本科学未来館および東京国際交流館を精力的に訪問し、日本の教育研究事情を視察するとともに、人脈の構築を図った。

また、8月21日～24日には、日本への留学生獲得のため、山野文部科学省審議官(高等教育局担当)を団長として、JASSO、北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、横浜国立大学、名古屋大学、大阪大学、九州大学、早稲田大学および芝浦工業大学の代表者計30名がブラジルを訪れた。サンパウロ大学およびリオデジャネイロ連邦大学で開催した留学説明会では、それぞれ約300名の学生が出席し、会場は満席となった。サンパウロ大学のアドネイ副学長によれば、このような盛況ぶりはイギリスの大学説明会以来、とのことであった。全体説明の後に設けた各大学のブースには伯人学生が詰め寄せて熱心に質問をしていた。

(4) インターンシップ

先にも述べたとおり、シエンシア・セン・フロンテイラスでは、各国企業等でのインターンシップを重視し、ブラジルの産業育成につなげることを明確に目標としている。

ブラジルでビジネスを行う日本企業にとって、質の高い現地人材の確保が課題になっているという声が少なからず聞かれるが、いくつかの日本企業ではシエンシア・セン・フロンテイラスを戦略的に活用し、日本に留学しているブラジル人学生に対するインターンシップの機会の提供を通じて、ブラジルの大学との関係強化や人材育成協力を始めた。

後述するが、他国の企業の中には、より積極的にシエンシア・セン・フロンテイラスを活用してブラジルとの関係を強化しているところがあり、日本の企業もより戦略的に協力するメリットがあると考えられる。

諸外国の動向

(1) 各国への留学状況

シエンシア・セン・フロンテイラスの公式サイト(2012年12月6日更新)によれば、CAPESおよびCNPqが承認した国別奨学者数トップ10の国は次のとおりである。米国(約4,700名)、ポルトガル(約2,900名)、フランス(約2,600名)、スペイン(約2,400名)、カナダ(約2,100名)、イギリス(約1,800名)、ドイツ(約1,700名)、オーストラリア(約800名)、イタリア(約600名)、オランダ(約600名)

である。そして、11位は韓国(約200名)となっており、日本は19位で29名である。ちなみに、インドは2名、ロシアは1名、中国は記載がない。この結果は、教育研究レベル、言語的なアクセスのしやすさが背景にあると考えられるが、例えば、最も進出企業数が多い外国がブラジル、というドイツでは、ドイツ語教育はドイツ側が負担して積極的にブラジル人学生を受け入れている。また、韓国については、産業界の積極的なコミットメントも背景に、戦略的に多くのブラジル人学生を受け入れている。

(2) 各国企業の取組

Hyundai、British Gas、General Eletric および Boeing 社など、ブラジルにおけるビジネスを重視している各国の企業は、ブラジル人の人材獲得を目的として、戦略的にブラジル人留学生をインターンとして受け入れることを表明し、CAPES および CNPq と協力関係を構築している。Hyundai については、韓国だけではなく、世界各地の Hyundai においてブラジル人学生のインターンの受入れを行う戦略をとっている。

(3) 日本ブラジル間でのシエンシア・セン・フロンテイラスの発展

日本の今後の経済成長やイノベーション、国際化を通じた活性化および国際競争力の向上を図る上で、日本はもっと積極的にシエンシア・セン・フロンテイラスに関わるべきではないか、というのが、ブラジルの政治・経済的な力や今後のポテンシャル、また、諸外国のシエンシア・セン・フロンテイラスとの関わり方も見た上での率直な私見である。

ブラジルは世界最大の日系人社会を有し、その数は150万人ともいわれる。日系人は、ブラジル社会において、一般的に勤勉、誠実、といったポジティブな評価であり、ブラジルの農業や工業の発展に多大な貢献をしてきた。また、日本は教育熱心で技術力が高い国というイメージが定着している。過去に日本政府の奨学金により日本留学した少なからぬ人々が、ブラジルの主要大学で教員となっている。このような背景を日本は活かさない手はない。

今後、日本ブラジルともに産学官が連携してシエンシア・セン・フロンテイラスを実質的に活用することにより、両国の高等教育、学術、科学技術および産業の協力が、活性化し、発展することを心から望んでいる。

(参考サイト)

ブラジル公式サイトトップページ

<http://www.cienciasemfronteiras.gov.br/web/csf/home>

ブラジル公式サイト日本のページ

<http://www.cienciasemfronteiras.gov.br/web/csf/japao>

日本の受入れ機関情報

学部生および博士課程学生

http://www.jasso.go.jp/study_j/csf_e.html

ポスドク

http://www.mext.go.jp/english/science_technology/1319964.htm

http://www.mext.go.jp/english/science_technology/_icsFiles/afiel_dfile/2013/01/16/1325194_01_3.pdf

医療をめぐる Language Barrier Free (ことばの壁を越える)

林田 雅至

(大阪大学 コミュニケーションデザイン・センター教授)

契機となった事件

1999年1月、国立研究機関勤務のインドネシア人国費研究員は息苦しさを訴えて、医療機関を受診し、入院を希望するが、「入院するほどの状態ではない」「ことばが通じないため診療ができない」として断られた。翌日状態が急変し、救急車で搬送されるも、3日後、意識も戻らないまま搬送先病院で死亡した。本人は日本語がうまくなかったとはいえ、英語、フランス語、ドイツ語および母語インドネシア語は流暢であった。

大阪府下北摂で発生した「医療とことばの壁」の重大な問題は、2003年に「みのお英語医療通訳研究会」を誕生させ、翌04年4月18日研究会主催「医療通訳って何？ 病院でぶつかるコトバの壁」講演会・シンポジウム（大阪国際会議場）を開催した。2002年に私の勤務先旧大阪外国語大学地域連携室で、医療通訳も含むコミュニティ通訳の社会的意義・重要性を考え、人材育成・派遣などの取り組みを始めていたが、私も追加発言者として参加した。以後、この研究会は問題「掘り起こし」の火付け役として非常に重要な社会的役割を果たした。

「外国語＝英語」からの脱却

ところで、1990年以降、入管法の改正により、ポルトガル語、スペイン語話者である中南米日系人労働者が大量に流入した。一昨年、外国語学と看護学が共存する愛知県立大学で開催された、医療分野ポルトガル語スペイン語講座（ポルトガル語・スペイン語による医療分野地域コミュニケーション支援能力養成）シンポジウム・テーマ「大震災から医療通訳を考える」（2011年11月3日）で発表報告したが、同席したJA あいち厚生連・豊田厚生病院看護師長による「豊田厚生病院における医療通訳の現状と課題」は興味深く、入管法改正直後に来日したブラジル、アルゼンチンの日系人看護師3名（出身国・国家資格取得）を日本での資格がないとはいえ、院長決裁で看護助手として本採用し、以来、医療通訳の最前線に立つ所謂ソーシャルワーカーとして、特に日系ブラジル人の医療健康対応に奔走してきた経緯がある。それはやはりトヨタの工場労働者の福利厚生を目的に実施されてきた特殊性があった。

2004年、製造業に非正規雇用を導入せざるを得ないほどに日本企業のグローバル化は一気に加速し、08年リーマンショックをもって、それまで一国市場主義であった「戦後の市場経済の枠組み」が、中国・インドなど

の人口を標準とするグローバル市場規模に拡大し、必然的に労働市場における多民族化が促進された。国際コミュニケーション・ツールとしての「貿易・通商・経済」英語の位置付けはいまだ変化はないものの、人々の生活レベルの多言語化は飛躍的に進んでいる。

こうした経緯から、Language Barrier Free（ことばの壁を越える）を可能にするものが、英語だけではカバーできない状況が生まれ、「外国語＝英語」からの脱却をはかる必然性に直面することになった。

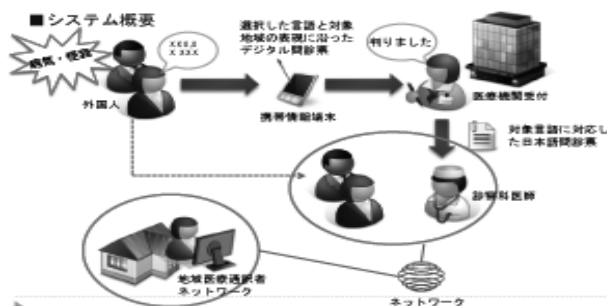
多言語の Language Barrier Free

極端な例ではあるが、2011年1～3月、大阪府下でギリシャ語医療通訳の緊急要請があった。難病腹膜播種（末期胃癌）患者およびその付き添い家族と病院側との意思疎通を円滑に行うことが求められた。現代ギリシャ語の話者、ネイティブ・スピーカーを探すのは至難の業であった。本学に3人の存在が確認されたが、最終的に欧州ポルトガル語に関心を抱く日本国籍を有する外国語学部ポルトガル語学科の教え子の2年生（当時）にその役割を託すことになった。小学校教育をドイツで受け、中学校をギリシャで、そして日本で高校から5年を過ごす当時20歳の若者は「ギリシャ語」を話す機会が皆無であり、また人道的な貢献をしたいと、無報酬でよいとまでいうほどだった。患者および家族の抱える言語ストレスを解消するためには、また日本側医師、看護師、医局などの言語ストレスを緩和するためには、当該言語の日常表現を分かり易い語彙、こなれた文法で通訳（仲介）できる所謂 Contextual sensitivity（文脈を汲み取る感受性）が必要であることが判明した。専門用語に精通することが不可欠とされる「医療通訳」において Contextual sensitivity の占める割合は相当に大きいと思われた。

肝心の患者の治療は、最終的に臓器ごとの摘出難手術を執刀する唯一の日本人医師の極みの技を以てしても困難な段階を迎え、「末期の水（終油の儀式）」をギリシャでとの本人および家族の希望で、3月10日関西国際空港から帰路に就いた。翌日からの日本の大混乱は敢えてここでは言及せず、また別の機会に譲りたい。

また、2009年7月初旬、鉄道資本主義開発の鑑とされる、阪急電鉄敷設による住宅街およびレジャーランド開発と宝塚少女歌劇団を生んだ聖地宝塚で、外国籍住民が1.5%を占め、日系ブラジル人に至っては0.15%という圧倒的な少数派の14歳の少女

多言語対応問診票システム



アンドロイド仕様多言語対応問診票活用概念図



医療をめぐる言葉の壁

が、家庭環境の酷似する日本人少女とともに、自己破壊的に両家に放火しようと企み、日系人家庭の生みの母を焼死させ、来日後7歳の折再婚した母から誕生した実妹と継父は重体となった。ただ、実妹が惜しめない愛情(母語)を注いで育てられる4歳までの5年間、彼女は11歳という第一使用言語(≒母語)が確立される公立小学校において、生活日本語は流暢であっても、学習日本語(≒第一使用言語)は未熟であった。家庭内で母語が育まれたかは疑問である。したがって、彼女にとって十分な第一使用言語は母語でもなく、また生活・学習日本語でもなかったかもしれない。かりに所謂ダブルリミテッド(第一使用言語が中途半端なこと)であったとすれば、これほどに気の毒なことはなかったのである。我々は個体差はあっても、一般的に11歳頃に第一使用言語≒母語確立の時期を迎える。私自身もそうだが、まるで生ものの美味しい食材を手に入れたかのような感激は誰しも経験するところである。言語形成期に体感する言語的に表現力が豊かになった喜びは例えようもない。そうして抽象的な思考が可能となり、地域社会の歴史文化を実地に学び、地図を手描きし、想像力を逞しくして、自前の地図を通じて現実認識を獲得するのである。

閑話休題、上記問題の少女について、低学年の頃、隣席のクラスメートが学習言語支援者となり、その子の友人二人くらいが増員支援者ともなって、同僚の3名が彼女を言語・生活面で支援に回るというシステムがあれば、現地初等教育機関で恐らく日系人は彼女だけであった可能

性は高いから、仮に40名クラスとして、4人組であり、10%を占め、1人だけの孤立無援状況から既に脱していることになる。クラスサイズという小規模なコミュニティながら、学年進行で5年生(11歳)頃までに、少なくとも母語ではないかもしれないが、学習日本語が第一使用言語として獲得された可能性は十二分にあったのである。けれどもそんなシステムは、幻想であった。なお、私はサンパウロの日系人や大阪の在日韓国朝鮮人などの地域総人口比と、言語・文化継承の最小単位2名という数字を組み合わせ、我々日本人にとって馴染みやすい「クラス単位40名」を想定して得られる5%を便宜上「マイノリティーの最下限」と捉えている。

アンドロイド仕様多言語対応問診票機器アプリ

今回共同開発したアンドロイド仕様多言語対応問診票機器アプリは、第一義的には「ことばの壁」に直面する本人が自立的に医療機関にアクセスすることを可能にするものであり、一方、病院側も同様に「ことばの壁」を緩和するためのツールとしての役割を果たすものである。また、機器の隠し味として、こうした Contextual sensitivity の必要性を喚起し、またその不在になりがちな現況を一時的に補填する役割も演じている。

2011年度7言語試作版(日本語・英語・中国語(簡体字・繁体字・韓国朝鮮語・スペイン語・ポルトガル語)が完成し、多言語施策関連の複数の学会、シンポジウム(上記シンポジウム、大阪国際交流センター主催「災害時における外国人支援」をテーマとする「人材育成講座」の発表報告「多言語での情報提供の必要性～Language Barrier Freeという概念」(2011年12月15日)、第53回「日本社会医学会」(2012年7月15日)などで報告した。11年11月～12月にかけて府下病院などで実証実験を行い、それを踏まえて年度末総言語数17まで増やす取り組みを行ない、12年6月下旬17言語版が暫定完成した。10月末から1週間大阪市で開催された「世界最大規模の国際金融関係会議 Sibos」において、日本語・英語・中国語(簡体字・繁体字)・韓国朝鮮語・タイ語の6言語版を無償提供し、外国人のための多言語対応問診票システムとして世界の国際会議の必須ツールに定着することを目指した。現在の暫定版は「日本語」を基軸とした運用になっているが、自在に基軸言語を変更できることが求められており、それが実現すれば、グローバルな国際社会においても、対応可能で、汎用性は極めて高い。

次年度以降も、大阪府下において開催される見込みの大型国際会議において、保健衛生面の「安全・安心」を保証する医療アプリとして必須装備機器となる可能性がある。

一方、現状の日本の社会構造は、なかなか外国籍住民が安全・安心に暮らしやすい状況には至っていない。そうした意味からも、こうした電子ソフトウェアの社会的意義は非常に高いと考えている。

カーニバル、せっかくなので、 もう少し理解度をあげていただくために

細川 多美子（邦字情報誌『ブンバ』編集長）

毎年ずいぶんたくさんの日本人観光客がリオデジャネイロのカーニバルを観覧しに来て、それなりに感銘は受けてはいるようだが、ここまで来てかなりもったいないことをしているのではないかと思う。実は観賞しきれていないであろうから。

「カーニバル」、「サンバ」、「エスコラ・デ・サンバ」といったものがブラジル独自の文化であるところまでは認識しても、さらにブラジル国内においても特殊な文化であることまでは、絢爛豪華な騒ぎに目を奪われて、踏み込まないでもいいような気にさせられてしまっている。

日本のお能や歌舞伎を鑑賞するには、古来のルールや特別な表現方法など、予習がないと楽しめないのと同じように、今や伝統技となったサンバの世界も特殊な暗号に満ちており、ひと通りのポルトガル語では解釈できない。

まずカーニバルのパレードを行う単位「エスコラ・デ・サンバ」からして、「サンバ学校」と訳されたものを見るにつけ、私は苦悩する。「エスコラ・デ・サンバ」は、サンバを教える学校では断じてない。エスコラと呼ばれるようになった所以は諸説あるようだが、とにかくこのエスコラはサンバ界にあって、本来の意味からは脱して独自の世界観を持つ言葉になる。

和訳としてはエスコラとそのまま呼ぶのが一番ふさわしいと思うが、意味合いからいえば、「サンバを核にした地域コミュニティ」なので、「サンバ・チーム」か「サンバ・コミュニティ」と訳すほうがわかりやすいと思う。

私は、イメージ先行でなかなか本質に迫れないこのサンバ・チームへの接近を試みて、サンパウロとリオのチームに加えてもらって、カーニバルの本番パレードに参加をしている。かつてはサンパウロでパレードしたあとにリオへ飛んでのかけもちという威勢のいいことをしていたが、なかなか過酷なので今はリオの人気チーム「マンゲイラ」（1928年創立）一筋にしている。今年で17回目になった。いつ卒業しようかと思うこのごろだが、サンバのリズムを聞くと、何を聞いてもやっぱり譲れないという気持ちになってしまう。そういう麻薬性がなければ、リオの人々もあれだけのことを毎年毎年できるわけがないだろう。

パレードに参加するとは ということかという

4000人からなるチームの一員として、テーマ曲（サン

バ・エンヘッド）を歌いながら、演出家（カルナバレスコ）のデザインした衣装（ファンタジア）をまとい、会場（アヴェニダ）を行進する。ショーの出演者となる。輝くライトの中、両側いっぱい観客に歓声で迎えられ、スター気分が味わえる。ここにも麻薬性がある。

行列の合間合間には7～8つの山車（アレゴリア）があり、先頭の挨拶隊（コミソン・デ・フレンテ）やチームのシンボルである旗持ち（ポルタ・バンデイラ&メストレ・サーラ）、約400人の打楽器隊（バテリア）などの花形が骨組みを作る。その間を埋めるのが我々一般グループ（アラ・コムン）で、色とりどり約30種の違った衣装のグループで構成される。ひとつのグループがだいたい100～200人からなり、実は私たちのように地元民ではないその場限りの参加者が相当数入り込んでいる。

この衣装は、オーダーメイドで11月ごろからチームのほうで用意してくれる。今年のマンゲイラの場合で1,100リアル（新聞によればどこのチームも軒並み25%の値上げだったそう）も払わされたが、普段チームに何も貢献しない参加者なので、おわびのしるしにそのくらい払ってもよいだろうという気概で申し込む。チームにとってこれが資金源になったり、手作りする人員の生活費になっていると思われる。

衣装は100リットルの黒いゴミ袋に各個人名入りで渡される。ちょっとした感動である。マンゲイラの衣装には、チームの意地なのか伝統へのこだわりなのか、審査員にも観客にも到底見えない凝った装飾が施されている。そういうところがばかばかしくも文化的な匂いを放っている。

世界でいう

「リオのカーニバル」というのは

リオ市およびその郊外に存在するエスコラ・デ・サンバの頂点に立つスペシャル、12チームが2晩にわたって繰り広げるパレード・コンテストだ。ひとチームの出番は82分。会場は1km、審査対象になる750mを4000人が制限時間内に抜けなければならないので、我々のような下々の参加者は40分くらいしか出番はない。

審査は花形の演技や打楽器演奏、全体の調和、テーマなど10項目あり、その他に減点方式で得点を競う。今年の優勝チーム、ヴィラ・イザベルは300点満点中の299.7点、制限時間を超過して0.6点を減点されたマンゲ



細川さんのマンゲイラ出演衣装

イラは 296.5 点で 8 位。どこのチームも完璧に近く、僅差で順位が決まる。

リオにはこのスペシャルチームの下に、いくつかのカテゴリーがあり、ランキングされているチームだけで 60、弱小チームも合わせると約 200 を超えるエスコラが存在している（ブロッコという別のカテゴリーを加えるとその倍になる）。

サンバの世界がどれだけ層が厚いか、また頂点にのぼりつくのがどれほど大変なことがわかるだろう。

自分の人生になかったものは、 体験しないとわからない

今回のマンゲイラのパレードに参加した我々グループは、サンパウロの駐在員ファミリーと日本からの旅行者 9 人を含む 29 人で、1 名を除いた全員が初出場。参加者のひとり（ポルトガル語を専攻する学生・20 歳）がその感想を以下のように述べた。

「リオのカーニバルって、ビキニのお姉さんが集まって踊るものかと思ってました。パフォーマンスとしての完成度の高さや、作品としてストーリーがあることに感動しました」

いつまでも露出度の高い美女たちが繰り広げるただの乱痴気騒ぎ程度に世間からイメージされているのは、本当にもったいない。



今回のマンゲイラ出演衣装を分解する

「あの重装備の衣装で歌いながら会場を踊って歩くのは、暑いし思ったよりつらかったです。でもみんなすごく楽しそうだし、こんなことで弱音を吐いちゃいけないのかなと思いました」

チームを支える人たちの取り組みは大真面目だ。日本人には真似のできないレベルで、いざこざは絶えないし、秩序はなっていないし、理不尽満載、合理性に欠くことしばしばでありながら、そうしてムキになって作品に仕上げ、「そういう全部がカーニバルだからね」とうれしそうにいつてのける。

2013 年のマンゲイラはテーマにいきなり「クイアバ」（マツグロソ州の州都）を選んだ。クイアバ市から 500 万レアルの資金供与を得たという。金銭の力でマーケティングに利用されている状態に非難の声もあるが、実際のパレードに盛り込まれている機知に富んだ内容、芸術性の高さ、徹底した夢とロマンと遊び心を目の当たりにすると、やるなあと唸らざるを得ない。他のことにはほとんど利用価値のない知恵の集大成、それこそがチームの誇りだ。裏でうごめく暗い資金なども嗅ぎ分けながら観賞すれば、500 倍楽しめると思う。

テーマもテーマ曲も衣装も山車も、毎年毎年新しいものが作られる。カーニバルは終わったとたんに、Vai começar tudo de novo!! = 懲りることなく、ぜーんぶ最初からやり直して次の年のカーニバルに備える。

最近のブラジル政治経済事情

—外務省中南米局提供情報その他より—

エコノミスト誌の経済政策批判

1月8日付英エコノミスト誌は、ルセーフ政権の一連の経済政策を批判し、マンテガ財務大臣を罷免すべきとの記事を載せた。エコノミストの記事は、(1) 政府の必死の経済刺激策にもかかわらず、2012年第3四半期のGDP成長率は前期比0.6%とマンテガ財相の予測の半分に留まり、ブラジル経済は“死に体”となっている。(2) 過去10年間の成長を支えてきた一次産品価格はもはや上昇せず、消費者は収入の多くを自動車やテレビのローン支払いに費やしている。低い失業率は労働に廻す余剰人員がほとんどいないことを意味する。成長は消費依存ではなく、高い生産性と投資からもたらされねばならない。これはブラジル・コストを削減することを意味する。(3) 大統領は競争力強化の必要性を認識しているが、経済スタッフはサプライ・サイドを刺激し、投資主導による景気回復を目指し、基準金利の引き下げ、法人税の引き下げ、空港や道路部門への民間企業参入促進策を行ってきた。(4) しかし投資は過去5期にわたり減少し、いまやGDPの18.7%とペルー30%、チリ、コロンビアの27%と比べても低い。企業は政府の介入を恐れて投資に慎重になっている。(5) 中銀はさらなる金利引き下げを行おうとしているが、これは間違いで政府はブラジル・コストを削減すべき。ルセーフ大統領が実践主義者であるなら、過度に楽観的な予測により投資家の信頼を損なったマンテガ財相を罷免すべきとしている。

これに対し、ルセーフ大統領は直ちに同記事に反論し、財務大臣の罷免を行う考えはない、ブラジル経済は2012年度第3四半期に0.6%を記録しており、次の四半期はさらに成長が加速するだろう旨発言した

イタイパー水力発電所は依然世界一

1月6日付クリチバのガゼッタ・ド・ボーヴォ紙は、2012年のイタイパー水力発電所〔パラグアイとの国境河川にある〕の年間総発電量は9,828万7千MWとなり、中国三峡水力発電所を約18万MW時0.2%上回り、引き続き世界一の座を守ったと報じている。三峡発電所は能力2万2,500MW、発電機32基で、1万4千MW発電機20基のイタイパーの発電能力を6割上回っているが、昨年の猛暑でイタイパーが全力稼働したため、同発電所のブラジル電力市場のシェアは19.85%、パラグアイの総電力需要の8割を供給している。

新たな高速鉄道の建設計画

1月15日付パロール・エコノミコ紙は、フィゲイレドEPL（企画・ロジスティック公社）総裁の談として、9月にはリオデジャネイロ～サンパウロ間の高速鉄道入札結果が判明するが、それと同時にサンパウロ～クリチバ、サンパウロ～ベロオリゾンテおよびサンパウロ～ミナスジェライス州三角地帯〔パラナイバ川とグランデ川に挟まれた州西部地域〕間の3区間について、技術面、経済面のF/S調査を実施する意向である。まだ1つ目の高速鉄道計画すら実現性がないのに、新たな計画を語る大規模工事好きの政府と批判する声には、同総裁はEPL設立の意図はルセーフ大統領の任期を超えた2014年以降の中長期的なインフラ計画を集積することにあると説明している。

また、2014年半ばにはリオ～サンパウロ高速鉄道の詳

細設計が完了し、同インフラ事業の入札が行われる予定であり、インフラ建設工事は10区間またはそれ以上の区間に分割することで建設期間を短縮し、2020年前に操業を開始することを目指していると述べた。

ヤマダ全国小売協会長インタビュー

1月1日にベレンに本拠を置くY.YamadaグループのCEOであるフェルナンド・ヤマダ氏がパラ州から初のAbrás（ブラジル小売協会）会長に就任し、以下を語った。パラ州では20年前までは消費者は州外まで買い物に行くこともあったが、現在では全国レベルで見ても競争力の高い小売チェーンが増え、基本的な製品はすべて州内で購入可能になった。パラ州市場は地場系〔Y.Yamadaがトップシェア〕にほぼ独占されているが、今後の大手の当地進出見とおしについて如何かとの問いには、州民の消費性向や好みを知り尽くした当地業者のサービスや品揃えに、大手は定着出来なかったが、あらためて地元業界として州内地方展開を含め対応したいと答えた。最近の大きな変化として、地域、収入、所得階層等に関係なく、国内のあらゆる消費者が、購入する商品の質と製品ブランドを強く意識するようになった。

また、都市部では消費者が自宅から遠くない一つの店舗内で、多様な種類の製品を購入出来るということも重要な条件になりつつある。この傾向を踏まえ、国内大都市圏を中心に各Bairro（地区）毎の小型路面店が増加していくだろうが、それには治安改善が喫緊の課題。治安対策コストは、教育水準の低さにともなう人材教育にかかるコストをすでに上回っていると述べた。

リオ州のスラム対策

1月17日付グローブ紙は、リオデジャネイロ市北部の、市内で最も治安が劣悪とされるジャカレジーニョおよびマンギーニョス地区のスラム街にUPP（軍警察治安部隊詰め所）が設置されたと報じている。それぞれのUPPに従事する軍警察官は計1,131名で、同地区の入り組んだ狭い道を効果的にパトロールするために32台のオートバイを配置し、機動隊で訓練を受けた警察官が巡回する点が特徴である。これでリオ州内のUPPは計30箇所となった。

今後リオ市北部のスラム街にUPPを設置し、継続的に治安対策活動が行われるが、今回UPPが設置された地区に居住していた薬物中毒者が近隣地区に移動し、主要大通りを含む路上を多数徘徊しているとの目撃情報もあり、リオの日本総領事館では在留邦人、旅行者に注意を呼びかけている。

電力価格引き下げ幅拡大

1月23日、ルセーフ大統領はTV演説において以下を述べた。まず、2月5日から実施される予定であった電力価格引き上げを1月24日から前倒しで実施するが、一般消費者向けおよび企業向けを当初予定より引き下げ幅を拡大し、それぞれ18%および32%とする。ブラジルは成長に必要な十分なエネルギーを有しており、短期的にも中長期的にもいかなる供給割り当てや供給逼迫のリスクはない。電力インフラストラクチャーへの投資によって、今後15年間で現在12万1,000メガワットの発電量を2倍にすることが出来るだろう。

ヤンマー・サウスアメリカ

食料生産・エネルギー変換の 分野でブラジル社会に貢献

北原 健二

(Yanmar South America Indústria de Maquinas Ltda 社長)

ブラジルで 56 年

ヤンマーのブラジル進出は、1957 年の Y a n m a r do Brasil 設立に始まり、今年で 56 年を迎えます。1960 年には、サンパウロ州インディアトゥーバ市にエンジン工場を完成し、今日まで 70 万台以上のディーゼルエンジンをブラジルで生産して参りました。また 2007 年に、現在の Yammar South America に組織改変し、エンジン、農業機械に加え、ディーゼル発電機セットの製造や、小形建設機械、船舶用エンジンの輸入販売も本格的に開始いたしました。

ヤンマー最初の現地法人

ブラジル進出のきっかけは、終戦後まもなくして、日系移民の方々から農業用エンジンの引き合いが多数あり、それを受けて 1954 年から市場調査を行い、当時ヤンマーの創業者で社長であった山岡孫吉が決断したことにあります。しかし、その当時、ヤンマーには海外といえば、台湾に駐在事務所があった程度でしたので、遠いブラジルでの会社設立と工場建設は、社運を賭けた一大イベントでありました。“石の上にも 3 年”と命じられ、設立メンバーとして家族とともにブラジルに渡った経理担当の後藤 隆は、その後、サンパウロ日本商工会議所の会頭などを歴任し、88 歳の現在も、サンパウロに在住しております。

工場設立から苦労を重ねて 5 年目で、ようやく 1 万台の生産に到達した後は、ブラジルの高度成長と政府の国産品保護策の恩恵を受けて、オイルショックまでは、「増産、増産で、作ったものは売れた」（後藤談）という順風の時代がありました。この時期、ヤンマーのサッカー黄金時代に、釜本選手とのコンビで有名なネルソン吉村（故人）は、元ヤンマーブラジルの社員で、日系人の草サッカーチームで天分を認められ日本に渡りました。

また、1970 年～80 年代初めにかけてアマゾン川を中心に、ヤンマーの日本製小型船舶用エンジンが年間 1 千台を超える勢いで販売された時期があります。現在でも、その当時のエンジンが、現役で一部稼働しており、“YAMMAR”は、信頼のブランドとして、水上輸送や漁業の分野でも広く定着しています。

全方位でヤンマー製品を推進

最初の現地生産は、単気筒の横型水冷ディーゼルエン



ヤンマー・サウスアメリカ

ジンから開始しましたが、その後、多気筒エンジン、ディーゼル耕運機、小型乗用トラクターの製造も手掛け、現在は、ブラジル全土で約 500 のヤンマーディーラーが、製品・部品・サービスの提供を行っています。

2007 年には、常用・非常用の電力源として、日本製の低燃費・低エミッションエンジンを搭載した 60kw までのディーゼル発電機セットの現地生産を新たに開始しました。また、電気に代わり、都市（天然）ガスを燃料としてビルの冷暖房空調を行う、ガスヒートポンプセットの販売も、豊田通商を通じて本年より本格的にスタートします。

また、建設機械の分野でも、都市部を中心に小形建機の需要が伸びており、ヤンマーも 2009 年から 8 トン未満の小形バックホーの輸入販売を開始いたしました。

船舶用については、レジャー分野のヨット用エンジンでは既に寡占に近いシェアを獲得しております。また、業務用分野においては、現在は、主に 400 馬力以上のエンジンを、フリーゾーンのマナウスを中心に販売しておりますが、今後は、需要の拡大が見込まれるリオデジャネイロなどの沿岸部での販売も期待しています。

ブラジルの成長とともに

長期的に、ブラジルは世界の中でも大きな成長が見込まれますが、特に食料とエネルギーの供給源としての役割は今後一層高まることと思います。一方で、地球環境に重大な影響を及ぼす原生林の保全は、今や世界レベルでの関心事です。

ヤンマーは、創立 100 周年を迎えた昨年に、新ミッションステートメントとして“自然と共生し、食料生産とエネルギー変換の分野で、お客様の課題を解決し、より豊かな暮らしの実現”を掲げております。ここブラジルにおいて、このミッションを、各事業を通じて実践していくことが、我々の使命であり、また、それにより、夢の大国ブラジルの社会と未来に貢献し、今後も弊社とブラジルが、Win Win の関係を継続できることを切に願っております。

細川周平『日系ブラジル移民文学Ⅰ』（みすず書房）を読む

●岸和田 仁（『ブラジル特報』編集委員、在レシーフェ）

千数百年の時間的広がりを持つ日本文学の歴史に、いくつかの時代区分を設けるとどうなるか。この難問に、西洋文学史との比較視角を援用し、独自の解釈を加えて答えようとした加藤周一は、大著『日本文学史序説（上下）』並びに『日本文学史序説 補講』（いずれもちくま文庫）において、五つの転換期があったと主張している。すなわち、第一の転換期 9 世紀（平安前期）、第二の転換期 12 世紀末～13 世紀末（鎌倉時代）、第三の転換期 16 世紀半ば～17 世紀半ば（戦国時代～江戸初期）、第四の転換期 明治維新以降（明治・大正・昭和）、第五の転換期 終戦以降、という五つである。

では、日本以外の国で最大の日系人口を有するブラジルにおける、「コロニア文学」ないし「ブラジル日系文学」とよばれる日本語表現文学の歴史に、いくつかの区分を設定するとしたら、どうなるか。ブラジル移民開始が 1908 年であるから、その歴史の長さは百余年しかなく、しかも日常生活の確立で苦闘する移民一世を表現者とする「素人文学」の歴史ではあるが、ざっと六つの期間に区分するのが順当であろう。

すなわち、(1) 草創期（未組織期）（自由移民の時代）

1908～24 年、(2) 確立期（植民文学期）（国策移民の時代）1925～40 年、(3) 空白期（地下潜伏期）（敵性民族の時代）1941～45 年、(4) 復興期（戦後混乱期）（勝ち負け抗争の時代）1946～51 年、(5) 高揚期（永住意識確立期）（戦後移民の時代）1952～73 年、(6) 成熟期（高齢化安定期）（新移民途絶の時代）1974 年～現在、の 6 段階である。

この時代区分は、このほど刊行された、付表を含めると 820 頁以上という途方もなく分厚い研究書『日系ブラジル移民文学Ⅰ』に収められた年表による。

今回は、「日本語の長い旅〔歴史〕」という副題を持つ、この大著を読みながら、日本近代史の一面を為すと同時にブラジル社会史にも通底する、ブラジルにおける日系文化活動史について考えてみたい。

近代日本の音楽史を専門とする気鋭の文化研究学者が、ブラジル文化という“魅力的な底なし沼”の調査に関与し始めてから 20 年の年月が流れた。その成果がいくつかの著作となっているが、音楽の分野では、『サンバの国に演歌は流れる―音楽にみる日系ブラジル移民史』（中公新書 1995）が、映画では『シネマ屋、ブラジルを行く―日系移民の郷愁とアイデンティティ』（新潮

選書 1999）が、それである。いずれも、歴史的事実の深読みに読者の多くをうならせることになった作品であった。日系ブラジル研究の第三作『遠きにありてつくるもの―日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』（みすず書房 2008）は、戦前の川柳を徹底的に読み解き、日系浪曲や舞踊についても論じた快著であった。

この第三作が、第 60 回読売文学賞を受賞したことから、本来は専門外であった文学研究に自信を深めた（あとかぎの表現に従えば、「慎みを捨てた」）著者が、小説から詩、俳句、短歌、川柳、歌謡までのブラジル日系文学全般を“ひたすら読み込む”という宿題を自らに課したうえで、自己流の解釈を、過剰なほどの多くの言葉をもって叙述したのが、今回の著書である。

付録として、文学賞（パウリスタ文学賞、農村と協同文学賞、のうそん文学賞）の全受賞作品名ばかりか荒筋まで一覧表になっているだけでなく、同人誌（『コロニア文学』『コロニア詩文学』『ブラジル日系文学』）に掲載された全ての小説作品一覧（荒筋も記載）が表になっている。この付表だけで 225 頁だ。

文学史概説でなく、ブラジル日系社会における全文学活動詳細解説であり、「ブラジル日系文学百科事典」と呼称できる内容である。唯一論じられていないのが、随筆の分野である

通読するのに一週間を費やした筆者の全く正直な読後感をいえば、「豊饒なコトバの連鎖が、フツの読者には過激なほど過剰で、読み通すのは至難の業、なんとか読み終えた時は、ヘトヘトになった」というものだ。

まず序文が長い。プロの文学でない素人文学を研究することについての意味付けが延々と続き、「私は素人の文学研究者だが、ここでは素人文学の研究者を自称する」との自己結論を引き出し、各論に入っていく。忍耐力のない読者は序文をすっ飛ばした方がいい。

但し、各論はただスゴイというしかない。ここでは紙幅もないので、短歌と川柳から少々引用するに留めるが、この大著は熟読するに値する、と強調しておきたい。

認識派歌人清谷益次の「輝ける日の来らむ希望今は無きか何に耐へ行かむこの屈辱ぞ」は敗戦の衝撃をうたい、革新川柳の代表者と目される安藤魔門のデビュー作「マルクスの価値ブラジルの野で迷い」にはニヤッとさせられるが、リベルダージの一面にある日本庭園に設置された石碑に刻まれた句「幾山河ここに恋あり命あり」も安藤の作品だ。

ブラジル流国家資本主義？ —新しい経済モデルの模索

菅藤 和彦 (Kanto Business Promoções Ltda. 代表)

グローブ紙の経済欄でコラムを持っているミリアン・レイトン女史は、そのコラムの中で、ブラジルの証券市場が伸びない理由の一つとして政府の企業に対する干渉度を挙げている。(2011年一月にはその前年の経済成長率7.5%を受けて証券市場は7万ポイントまで達したが、その後の成長率の低迷もあって、昨今では5.9万ポイントとなっている。)

それを、証券市場を代表する企業で見ると、ペトロプラス(優先株)はこの2年間で30%落ち込み、(2009年比では50%の落ち込み)、Vale社は18.5%、Eletrobrasに至っては昨年8月以降54%も落ち込んでいる。その共通項として政府の干渉を挙げている。

つまり、ペトロプラスの場合は、国内の石油生産が思うように伸びなかったことから石油の輸入を余儀なくされており、それを国内業者に販売しているが、その価格がインフレ再燃を恐れる政府により、輸入価格を下回る水準に抑えられているため、これが同社の財務体質を圧迫していることがこれにあたる。

Valeの場合は、政府がパラ州に製鉄所建設意向を持っていたが、それをVale社にやらせようとしていたところ、当時のアグネリ社長が反対したことで、同社のコントロール権の60%を持つ政府が彼を更迭、代わりに賛成派のムリロ氏を据えた。偶々この交代劇が中国発の鉄鉱石のスーパーサイクルの転機と重なったこともあり、投資家が逃げた。

Eletrobrasの場合、電力料金の高騰がこの国の産業の価格競争力を弱めると判断した政府が、昨年電力料金の大幅カットを決めた(MP-579)。これに嫌気をさしたペンションファンドが電力業から撤退した。これと同様なことが通信業界、清掃業界でも起きている。

ミリアン・レイトン女史は、政府のこうした干渉があることで、対象となった企業の展望に不透明感が高まる点を指摘している。(以上1月31日付けコラムより要約)

昨年末、同じコラムで彼女は難航しているリオ〜サンパウロ間の高速鉄道プロジェクトで、局面打開のため、プロジェクト実施に関わるすべてのリスクを政府が負う新しいスキームを打ちだされたことについても批判している。またそれに絡み、彼女が対談した元中銀総裁のアルミニオ・フラガが「政府はピラミッドを立てようとしている、今この国にとってピラミッドなんて何の役にも立たないのに」と発言していることを紹介している。

政府の企業に対する干渉との観点とは、この国に世界市場で存在感を持つ企業を育てるとの考え方にも表れている。これは一種の覇権主義ともいえるもので上述した干渉とは異なる、実は軍政下の1970年代の考え方にも繋がるものである。(企業の中から、これは

と思う相手を政府が選び、投融資の形で全面支援 — 軍政下では国内市場でのプレゼンスが狙いだった。)

こうした考え方が出てきたのは2008年末のリーマンショック以降、為替が一挙に変動したことで、為替相場に手を出していた大手輸出企業が相次いで倒産の危機に直面した際からである。時のルーラ政権はこうした企業の救済に動き、非鉄Votorantimに対してはブラジル銀行がVotorantim銀行に50%出資する形でこれを救済、また食品加工の最大手Sadiaに対してはPerdigaoとの統合を促進し、その後新会社が米国の大手食品加工業者を買収することにも手を差し伸べている。(この買収結果、BRFは世界最大の食品加工業者となった。)

そして今回、ドイツのThyssenKruppが巨額の累積債務に悩むブラジルCSA (Companhia Siderurgica Atlantico) と米国における圧延工場(併せてTKS Americas)売却を計画していることを受けて、ブラジル政府はこの買収に手を挙げたCSNに、BNDES(国家経済社会開発銀行)を使い、同社に対する投融資の形で全面的に支援する(総額40億ドル)ことを検討中であるという。(Valor紙1月18日付け記事より)

つまり、海外鉄鋼資本が牛耳っているこの国の鉄鋼業(Arcelor Mittalは旧Belgo Mineira、ツバロン製鉄および特殊鋼のAcesitaを傘下におさめ、新日鉄とTechintグループはウジミナスのコントロール株主であることを指す)の現状打開には、このTKS Americas買収は絶好の機会だとの考え方を持っている。CSNを後押しすることで彼等に匹敵するブラジル資本の製鉄会社を作ろうとの狙いがこめられている。(CSNの5.5百万トンにCSAの半製品能力5百万トン、さらにアラバマの圧延能力4百万トン、合わせて1,000万トンクラスの製鉄会社誕生)。国力を挙げて鉄鋼の世界市場のプレイヤーを育てようとする試みである。

以上見てきた如く、今ブラジル政府は企業に対する国の干渉度を高めつつある。それが全体として、ブラジル経済の進路にどのような影響を与えるか未だ分からない。場合によっては再び1970年代への回帰に繋がるかもしれないし、場合によってはラテンアメリカに新しい経済モデルをもたらすかも知れない。

いずれにしても、2000年の時点でブラジルは、リオドセ社の長期戦略策定の際、シンクタンクをも動員し中国経済をかなり詳細に分析している。その結果、中国の国家資本主義に近いこうした新しい動きが出てきたことは注目に値する。

考えてみれば、日本にもかつて田中角栄が列島改造論を掲げた時期があった。

(筆者は、元川崎製鉄リオデジャネイロ事務所長。在リオデジャネイロ)

イベント & 新刊書紹介

☆イベント☆

☆平成 24 年度理事会の開催

3月28日(木)午後2時より、当協会の平成24年度理事会を、当協会隣の光和ビル地下1階会議室にて開催します。主な審議案件は平成25年度事業計画及び収支予算です。

☆講演会

「米州の今 一大使の最新報告」

発展するラテンアメリカの中で、地域の両雄といえるブラジルとメキシコは、世界経済の将来に大きな影響を及ぼす国という過言ではありません。公務のため一時帰国される両国駐在の大使に生の報告を聞かせて頂く機会を得ました。

日時：2013年3月7日(木)午前10時～12時

会場：富国生命ビル28階会議室

東京都千代田区内幸町2-2-2

電話 03-3591-0461 <http://fukoku-bldg.jp/access/>

講師：目賀田 周一郎 メキシコ大使 (10:00～10:40 講演質疑応答)
三輪 昭 ブラジル大使 (10:40～11:20 講演質疑応答)
山田 彰 中南米局長 (11:20～12:00 講演質疑応答)

参加費：会員 2,000円、非会員 3,000円 (当日会場にて申し受けます)

申込受付：先着100名まで

申込締切：3月5日(火)

申込先：協会事務局 E-mail: info@nipo-brasil.org Fax: 03-3597-8008

本講演会は、ラテンアメリカ協会との共催、米州開発銀行アジア事務所の後援にて行います。

☆第20回 ランチョン・ミーティング

日時：2013年3月13日(水)正午～

午後2時

講師：秋山祐子氏 (不動産鑑定士、(株)緒方不動産鑑定事務所大阪支所長・サンパウロ大学不動産研究所研究員)

演題：「ブラジルの不動産関連制度と最新のマーケット動向」

場所：アークヒルズクラブ (アーク森ビル イーストウイング37階) 地下鉄南北線「六本木1丁目」より徒歩2分、地下鉄銀座線「溜池山王」より徒歩3分

参加費：会員5,000円、非会員6,000円 (当日会場で申し受けます)

申込み：食事手配のため、必ず事前に協会窓口へ。先着50名まで。

その他：(1) ドレスコード：(男性) ジャケット・ネクタイ着用
(2) キャンセルの場合、前日(3月12日)正午までにご連絡いただけないときは、参加費のご負担をお願いします。

☆ポルトガル語春季講座

初級Ⅰ：4月9日～7月9日(火曜)

岸和田マリレーネ先生

初級Ⅱ：4月10日～7月10日(水曜)

古庄マリア先生

中級：4月12日～7月12日(金曜)

上運天ミゲル先生

上級：4月11日～7月11日(木曜)

三浦マリエ先生

時間：いずれも19時～21時 各クラス全13回

場所：当協会教室 (JR新橋駅より徒歩3分)

受講料：全クラス共通

協会会員：32,500円

非会員：45,500円

お問い合わせ・お申込は、協会事務局へe-mailまたはFaxで。

☆在日ブラジル商業会議所川上会頭へ感謝状贈呈

2013年1月25日、ザ・ペニンシュラ東京ホテルに於いて行われた在日ブラジル商業会議所(CCBJ)川上オズワルド会頭送別会において、協会清水会長より「当協会との協力関係拡大に多大な尽力をされた功績に対し深甚なる感謝の意を表します」との感謝状を贈呈した。

☆コチア青年三世訪日研修団代表の当協会表敬訪問

一昨年に引き続き、第2回コチア青年三世訪日研修団が平成24年12月28日から平成25年1月21日まで日本での研修を行った。研修団一行36名は1月17日に東宮御所にて皇太子殿下の謁見を賜った。この謁見のために協力した当協会に対し、研修団代表が1月16日に協会清水会長、池田副会長を訪問、謝辞があった。

☆新刊紹介☆

『実業家とブラジル移住』 渋沢栄一記念財団研究部編

20世紀初頭からブラジル、アマゾンへの日本人の入植がさかんになったが、岩崎久彌、渋沢栄一、武藤山治、平生鈞三郎といった実業家が、ブラジル移住事業に抱いた夢、構想、企業活動との結びつきを解明している。また移住事業を支えた移民農業への金融、本国送金、大阪商船の南米航路経営、ブラジル移民の国際的背景としての米国との関係について分析している、きわめて有用な移民史料資料。(不二出版 2012年8月277頁 3,800円+税)

『日本からブラジルへー移住100年の歩み』 日伯協会編

2011年に神戸で開催した「知られざるブラジル移住の歴史展」、第1期笠戸丸と4人の先駆者たち(1803～1927年)、第2期移住の成熟期を支えた人々(1928～45年)、第3期戦後の移住と日系人の活躍(1946～2008年)の内容を多くの貴重な写真とともに取りまとめたもの。(財団法人日伯協会 2012年12月80頁 1,500円+送料。問い合わせは info@nippaku-k.or.jp Tel/Fax 078-230-2891 へ)

『ブラジルにおける公教育の民主化ー参加をめぐる学校とコミュニティの関係』 山元 一洋

公立小中学校の運営に教師、生徒、保護者、地域住民、教育専門家が関与することで民主化を図るブラジルの公教育の歴史、枠組み、サンパウロの初等学校での運営の実態を分析している。(上智大学イベロアメリカ研究所 2012年12月52頁。問い合わせは ibero@sophia.ac.jp Fax 03-3228-3229 へ)